

## ヘルマン・ブロッホ『夢遊の人々』の 「哲学的省察」について

中 村 善 一

1932年に発表された『夢遊の人々』(Die Schlafwandler)の第三部に、ブロッホは、「学問的省察」ないしは「哲学的省察」とでもよぶべき性格の論理的文章を多量に挿入している。ほんらい叙事的な物語である長編小説(Roman)に、抽象的で学問的な論議が侵入しているわけである。

ロマンというジャンルは、もともときわめて自由な形式と内容を許容するものである、といわれている。したがって、学問上の論議や哲学的省察がロマンに取り入れられることは、必ずしも不当ではないし、以前にこれに似た試みがなかったわけではない。<sup>1)</sup>しかしブロッホの場合は、最初から意識的である。彼は、みずからの小説理論において、「博識的ロマン(der polyhistorische Roman)<sup>2)</sup>」という独自の術語を使って、ロマンにおける「省察」の意義と役割を検討する。ロマンにおける省察という問題は、彼の「博識的ロマン」という概念の意図するところのすべてではないし、いわんや彼の小説理論をあますところなく説明しうるものでもないだろう。しかしこれは、少なくとも『夢遊の人々』の第三部にとっては、きわめて重要な問題であり、彼の初期の小説理論を解明する手がかりの一つであろう。

R・ブリンクマンによれば、現代ドイツ文学の歴史において、つまり今世紀以来、「現代の問題、とくに現代文学の問題、もっと正確に言えば現代小説の問題を、ヘルマン・ブロッホほどに、多様にかつ包括的な方法で

考え抜いたドイツ語作家は他にはいない。<sup>3)</sup>」ブロッホがきわめて執拗に自分自身の小説理論を確立しようとしたこと、つまりロマンの世界像を見きわめようとしたのは、伝統的なロマンの形式が彼には役に立たなかったからである。後に詳しく検討することになるが、ブロッホは今世紀の人間世界を「価値の崩壊」の時代として把握する。すなわち彼によれば、信仰という包括的な価値に基づく全価値構造が崩壊したのである。存在はたんなる機能性になり下り、物理的世界像でさえも、抽象性へと解体してしまっている。人間にとって、かつての現実はまだ存在しない。この解体してしまった現実を受け止めるのは、もはや伝統的なロマンではない。叙述の対象の変化や解体は、それを盛る芸術のスタイルをも変化させる。表現の媒体であり続けるために、ロマンは、変わらざるをえなくなる。

事実、今世紀に入ってロマンは、その伝統的な形式を一新した。まず直接的に事実を記述する傾向が導入され、内的な体験的時間性が重んじられるようになり、そのうえモノログの要素が異常に増加した。ロマンは、より抽象的かつ超個人的になり、物語の次元を超える。E・カーラーが彼の著名な論文で書いているように、「さまざまなやり方で、さまざまな側面から、直接的なリアリティーがロマンのなかに侵入してくる。<sup>4)</sup>」いろいろの領域の学問の内容が、そのままロマンに編入され、物語の展開に関連づけられる。学問的論議や哲学的論説は、もともと非文学的要素であり、非虚構的な性格を持ち、伝統的ロマンにとっては異質の存在である。それゆえ学問的ないしは哲学的な「省察」のロマンへの侵入は、伝統的なロマン形式の解体を意味するが、今やこの直接的リアリティーは、「物語の有機的要素として」<sup>5)</sup>、意識的にロマンに利用される。『夢遊の人々』の第三部では、物語としてのハンドリングの流れと平行して、独自の歴史論と認識論が展開されている。さらにその代表的な登場人物たちは、「さまざまな出来事の動きと出来事の諸層を同時的かつ典型的に統合しうる」<sup>6)</sup>ように、等身大以上の統合的人物にされ、作品全体は、「出来

事が複数の平面で同時に進行する多層的で多段階的」な構造に仕立てられている。

以上が、『夢遊の人々』という野心的な作品の輪郭であるが、本稿では、まずブロッホの小説理論の特徴、特に「博識的ロマン」の意味するところのものを確認し、ついで第三部の実際を見ながら、ロマンの内部における「省察」(Reflexion)の存在意義とその文学的機能を見てゆきたい。

## 1. ブロッホの小説理論の諸相

ブロッホは、1933年に『長編小説の世界像』(Das Weltbild des Romans. Ein Vortrag), 1936年に『ジェームス・ジョイスと現代』(James Joyce und die Gegenwart)を発表している。これらは、彼の初期の小説理論を知るうえで重要なものである。この二つの論文によれば、ブロッホにとってロマンは、まず認識的(kognitiv)機能を果たすべきものであり、倫理的課題を担い、さらには価値論の哲学と美学上の問題に密接な関係をもっている。すなわちロマンは、合理的なものと非合理的なものとをないまぜにした複合体として、まず認識的機能を果たそうとするが、それは同時に倫理的、価値論的、美学的な方向づけと色合いを付加される。

ロマンにおける世界叙述の全体は、ブロッホにとって「理念への最も大いなる接近」(7:101)<sup>7)</sup>であり、ロマンは個々の認識の統合的総体と考えられる。すなわちロマンは、科学が決して達成し得ない、認識の全体性という目標を達成しようとする。細分化された科学の個別的体系において成就されえないもの、つまり「生の合理、不合理を問わないいっさいの要素の合一」(6:237)を果たすもの、と見られる。ブロッホの認識体系においては、合理主義がすべてではない。合理的なもの、科学的なものは、

ロマンの構成要素の一つにすぎないのであり、その働きは相対的である。科学的方法は過小評価されはしないが、決して全能でもない。「芸術作品の価値持続は、その構成に關与している科学原理の価値持続よりも長い」(7:87)のであり、全き認識のためには、「合理的なものだけでは不十分なのである。」科学が進歩という思想に規定され、一定の体系のもとに統合されるのに対して、ロマンにおいては、「絶対的と全体性という二つの言葉が統合的ベクトルと考えられる<sup>8)</sup>。」そして新しい現実に対する新たな認識は、つねにもう一つのロマンを構築する。その意味で、「創造とはつねに認識の焦燥である」(6:237)。逆に言えば、新たな認識の生じる余地のない場、たとえば絶対的な神の存在が疑われることのない宗教的な時代、すべてのものが矛盾なくそこに収斂する神話的な時代には、ロマンが生まれる余地はない。社会主義という価値体系が唯一絶体である社会も同様である。ロマンは、必然的に非合理的要素と不明瞭な部分を孕みながら、創造的なパースペクティブに方向づけられてゆく。

1945年トーマス・マンの70才の誕生日を記念して、ブロッホは『文学の神話的遺産』(Die mythische Erbschaft der Dichtung)という論文を*Die neue Rundschau*誌に発表している。その内容は、みづからの小説理論の再確認であり、ほぼ次の三点に整理できる<sup>9)</sup>。(1)ロマンは、その時代の学問的成果ないしは時代精神の影響を受ける。そしてその成果や精神を担うためにロマンは博識的にならざるをえない。(2)ロマンは、「倫理的・予言的な当為」(6:246)という方向づけを持つのであり、未研究の領域や実証されていない真実をも追求すべきである。(3)ロマンは、その博識的特性の所産として、「宇宙進化論」(Kosmogonie)的な全体性を志向すべきである。つまりロマンは、交響樂的なないしは建築学的な表現形式を模倣して、統合的な世界像を表現するものである。そしてこの世界像には、作者の思考のなかで確認されたイメージを定着させるために、超自然主義的なリアリティの付与が必要となる。そのために、比喩の連環、

象徴の連鎖、ライトモチーフの反復などのいろいろの技法が駆使され、同時性と全体性が確立される。「象徴的なものの無限な多面化の可能性という同時性」において、「分割不可能な統合という意味で芸術作品の超時間性」(6:192f.)がつくり出される。換言すれば、認識の焦燥に発する形而上学的な全体性が追求され、学問的省察という合理的で非文学的なものがロマーンの構成要素として取り入れられる。これがいわゆる「博識的ロマーン」である。

「博識的ロマーン」の実体を確認するために、これを伝統的なロマーン形式および同時代の他の作家のロマーンと比較してみよう。ブロッホは、過去のロマーンを全面的に否定するわけではない。すでに述べたように、歴史的状況の変化がロマーンを変化させる、というのが彼の基本的認識である。「過去のロマーンは部分的領域をおさえた。それらは教養小説、社会小説、心情小説であって、それらがこの部分的領域においてしばしば科学の、ことに心理学の先駆者だった。」(5:360) しかし今日では、ロマーンにおいても似而非科学性は通用しない。今日のロマーンは部分的領域に関係するのではなく、あくまでも総体としての全体性の造形という認識意図に従わなければならない。ここに過去のロマーンと博識的ロマーンの違いが明白である。さらにブロッホは同時代の作家、たとえばジード、トーマス・マン、ハクスリーさらにはムシルの作品を、博識的作品の徴候として評価するが、また同時にそれらを批判する。その理由は、彼らの作品では、いわゆる「省察」がロマーンのなかで機能していないからである。それらにおいては「省察」が教養ある登場人物の発言という体裁をとったり、教養的要素としてロマーンに投入されている。「省察」は、それを用いて物語を飾り立てるかのようになり、あちらに少しこちらにこれだけと、「水晶のようなブロックをなして」(8:60)はめ込まれているだけである。ブロッホの考えでは、ここでは「博識は決して自己目的ではなく、あくまで描写方法なのであって、いうところの科学的内容とは全然かわりがな

い。)(6:196) 結局「省察」が、ロマーンの方法上のものになりえているか、わざとらしい不自然な内容に墮してしまっているかの違いである。さらに、たとえばムシルの場合をつぎのようにブロッホは批判する。「この手法が不合理からの逃亡であり、不合理を合理の網で捕えることによって不合理を無害なものにしようとする努力である。」(6:233) ブロッホの考え方によれば、不合理もまたそれなりの存在価値を有している。むしろ合理的なものだけでは不十分である。不合理をも含めた全要素を統合するのがロマーンの使命である。たとえば「抒情的なものはどんなに合理的な手段を駆使しても表現しつくされない」(6:230)から、ムシルのすべてを合理的に処理しようとするやり方は、ブロッホの考えている博識的ロマーンとは異質なのである。

つぎにブロッホは、博識的ロマーンの特徴として、「理念としての語り手」ということばを使う(6:197)。過去のロマーンの場合には、主体と客体とが互いに静的に対峙し、それぞれは当然、相対的な別々の存在であった。その場合、「物語の主体は自律的な地位に立っていて、いわばアルキメデスの地点に立って、そこから現実を客観的所与とみなして描<sup>10)</sup>写」した。これに対してブロッホは、この静的な主観－客観関係を排除するために、相対性理論の方法を提唱する。「見る」という主体の行為そのものが観察の対象、すなわち客体として、観察領域のなかに引きずり込まれることになる。主体と客体との統一が意図されるわけである。この相対性理論が、ロマーンの語り手(Ich)に適用されるとつぎのようになる。「対象を単純に観察筒中に据えて単純に記述すべきではなく、描写主体、つまり理念としての語り手と、それに劣らず語り手が描写対象を記述するのに用いる言語とは、描写媒体として観察筒中に入れられるべき」(6:197)であり、ここでは描写対象と描写手段との統一が企てられることになる。Ichはこの場合もはや全能の語り手ではない。ここにあるのは客体を意のままに支配するIchが展開する物語ではない。かつて神のように絶対にして唯一のも

のであったIchは、相対的存在になったり、あるいは複数になってしまう。しかもこの「理念としての語り手」は、ロマンそのもののなかで確立されることによって、ロマンの構成要素ともなる。「理念としての語り手」は、超個人的な方法論的論理から生まれたもの、現代物理学の実験的方法との関連から引き出されたものであるが、同時にM・ドゥルツアックの指摘するように、「『措定の措定』というブロッホの認識論的構想と結びついている<sup>11)</sup>。」この「措定の措定」(2:596f., 8:94, 10:324)という考え方は、ブロッホがその哲学的文芸論を展開するときに見られる、独自の術語である。措定の措定という同じ行為の反復による二重の思考方法は、「それはそれで英知的な自我の構造を反映」(2:596)するものであり、ともかくも「価値主体」(Wertsjekt)を暫定的であれ仮定的であれ設定してしまおうとするやり方である。そしてこの「価値主体」はまた、当然そこに独自の世界形成を企てることになる。「理念としての語り手」ということばの意味するところは結局、「実体化された価値主体」(2:597)と言いかえてもよいことになる。

さらに、「博識的ロマン」の特徴として指摘しておくべきもう一つの事実は、物語性の衰退ということ、すなわちハンドリングの存在意義の低下である。これは二十世紀の多くのロマンに共通してみられる現象であり、叙事的営為であるロマンにおいて「物語る」ということが軽視されてしまうのである。

この事実の背景を一言でいえば、「現実の崩壊」である。いわゆる「現実の崩壊」という現象は、二十世紀初頭の精神史上の出来事であり、当時のドイツ文学にみられる一般的特徴の一つであった。人間を取りまくあらゆる事物や現象は、ただ浮遊しているにすぎず、名前はあるが本質のないもの、にすぎない。部分はあるくまでも部分であり、それが集って全体を形成するとは信じられず、部分は次々とより小さな部分へと崩壊した。それは、ホーフマンスタール、リルケ、ムシル、ベンそしてブロッホらに共通

の現実感覚であった。それ以前の叙事的ジャンルにあっては、「物語る」というのは必要にして十分な行為、本質的方法であった。小説はストーリーを語るのであり、ストーリーがなければ小説は存在しえなかった。「それはこうなった---そして次に---」というのがほんらいのパターンであり、出来事の継起こそが作品の基本的原理であった。<sup>12)</sup>ところが、「時間的因果的な継起において物語るということは、現実崩壊の時代には疑わしくなる。<sup>13)</sup>」物語ること自体がナンセンスになり、作者が誠実であろうとすれば、ロマンは必然的に非物語的になる。このことをブロッホは文学の倫理的課題であるとまで明言し、「物語を記述する作品」(8:184)を激しく非難する。現実が「非物語的」になっているのに、ロマンで物語を記述することは、不誠実であり、キツチュであり、倫理的に非難されるべきことになる。しかし『ウェルギリウスの死』はともかくとして、『夢遊の人々』の場合は第三部においても、ハンドリングが皆無というわけではない。主人公ユグノオを中心とする物語は存在しているし、それ以外にもいわゆる「平行的物語」が挿入されている。しかし、「作者はたんに自然主義的な外的事象を描写すること限定してはならず、作者は無意識現象から純粹省察に至るまでの全段階を」(10:193)問題にしなければならない。つまり作者は物語ることのみに専念すべきではない。ハンドリングは、ロマンの唯一絶対の要素ではなく、たんに一つの要素であり、以前よりもその存在意義が低下したのである。

博識的なもの(「省察」)の機能と存在意義について論ずる前にまず『夢遊の人々』の第三部を概観しておきたい。第三部は、博識的要素がロマンの描写方法の一つとして実践的に適用されている所であるから。

## 2. 第三部における「省察」

『夢遊の人々』は、ライン版ブロッホ全集では第二巻に収録され、687頁



の長編小説である。この作品は、「第一部1888年パーゼノウまたはロマン主義」、「第二部1903年エッシュまたは無政府主義」、「第三部1918年ユグノオまたは即物主義」の三部から成っている。非文学的な要素、つまり「省察」を多数内蔵しているのはこのなかの第三部であるから、この小論でわれわれが問題にするのは、この部分だけである<sup>14)</sup>。

第三部の舞台は、第一次世界大戦の末期のモーゼル川沿いのある谷あいの一小都市。主人公ユグノオは、逃亡兵としてこの町へ来る。彼はずる賢く、即物的で冷やかな商人として、この町の有力者に巧みに取り入っている。第三部にも、第一部と第二部の主人公が現われる。第一部の主人公パーゼノウは、老いたる陸軍少佐としてこの町の司令官であり、第二部の主人公エッシュは、敬虔な人物となって地方新聞の印刷所の所有者である。第一部第二部での登場人物ベルトラントはここでも重要な役割を演ずるが、彼については後ほどあらためて論じる。物語としては、最終的に革命の混乱のなかで、ユグノオはエッシュを殺害し、故郷のエルザスに身を隠し、尊敬すべき市民として身を立てる。第一部と第二部の基調は、非理性的なもの非合理的なものから人間は逃れられない運命にあるということであったが、第三部においてはもはや逃げ道が探索されることさえない。「時代の申し子」(8:26)であるユグノオは、「夢遊の人々」にすぎないパーゼノウやエッシュの敵ではない。彼には、商業上の利益と成功という確かな目標がある。ユグノオは商人としてのそれなりの世界観をもち、目的に方向づけられているので、「夢遊の人々」よりは強く、世俗的な成功にも近い。しかし彼の世界観は、あくまでも部分的かつ一面的であり、統一的で全体的な世界観ではなく、そこに究極的な形而上的調和はえられない。それは「私的論理」にすぎないのである。

この第三部には主人公ユグノオをめぐる中心的な流れの他に、さまざまな人物をめぐる一見独立的な複数の物語が平行的に並置されている。つまり弁護士夫人ハンナ・ヴェントリングの物語、国境警備兵ゲーディッケの

物語、それに陸軍病院の患者、医師、看護婦たちをめぐる物語がある。これらにおいて、戦争末期の状況がリアリスティックに描かれ、時代状況と現実的な諸問題が叙述されているが、これら複数の物語は、それぞれに現実崩壊の最終的段階に達している。さらにこの第三部には、「価値の崩壊」と題された、物語のハンドリングとは表面的に無関係の多数の哲学的論文が挿入されている。このいわゆる学問的「省察」は、非合理的な諸現象を分析し、時代徴候を鑑定し、現実の崩壊を価値崩壊の帰結として、歴史哲学的に解釈する。このような理論的学術論文は、ロマンの全体的構造のなかで、なにを意味するのか。ロマンのなかに純粋な概念的思弁がむき出しのままで存在することは、ロマンの全き構造を崩すことにならないのだろうか。

第三部の全体は88章から成っているが、いまこれを内容的に整理してみよう。まず「価値の崩壊」が全部で10章あり、「ベルリンの救世軍の少女の物語」が合計16章を占める。この両者の計26章は、おのおのにタイトルが付されて、主たる物語の展開とは、一見別物になっている。この26章以外の残りは合計62章だが、中心的物語としてのユグノオのハンドリングに36章、ハンナ・ヴェントリングの物語に9章、ゲーディッケの物語に7章、そして陸軍病院の物語に10章があてられている。また文章のスタイルとしても種々雑多である。「価値の崩壊」の所は学術論文のスタイルだが、「少女の物語」には抒情詩まで含まれている。第59章はドラマのスタイルで書かれ、第65章ではアフォリズムの形式、33番目と70番目の章では新聞の論説文が使われ、第30章では講演のテキスト、46番目の章と最終章には書簡文もみられる<sup>15)</sup>。さまざまなスタイルの文章を故意に一つのロマンのなかに集結させることによって、作者は文芸の様々なジャンルをいったん解消して、ロマンにおけるそれらの再統合を企てている。作者は、多くの文学的表現手段を、ロマンという総合的形式に統合することを試みる。「ロマンは、理性的認識、叙事詩、抒情詩、そしてさらにそ

の他の多くの表現の諸要素を統一することになる。」(8:68) この文章スタイルの統合の企ては、さらに思考方法の点でも独自の包括的形式の完成へとつながってゆく。すなわちロマーンは、合理的なものと非合理的なものとの両方を包含した思考実験の場であり、また表現媒体であると考えられ、ロマーンは「合理性と非合理性の重旋律」(6:238)と名づけられる。

M・ドゥルツァクの報告によれば、第三部の成立の事情は、比較的詳しく判明している<sup>18)</sup>。1930年の時点では、第一部と第二部はかなり完成に近い体裁を整えていたが、第三部は「エピローグ」と題された数ページの草稿にすぎなかった。ユグノオは、当初の構想では作者ブロッホの精神的状況を反映し、パーゼノウやエッシュといった人物の反命題としてつくられ、前の二部を展開するのではなく、むしろ終息させるために構想されていた。しかし執拗に何度も改作され、書き込みが加えられた。色の違ったインクを使って、最後のギリギリの時点まで精力的に仕事が続けられた、という。その結果、第三部は徹底的に変更され拡大された。「博識的ロマーン」の理論に基づいた新しいタイプのロマーンになったのである。第三部には、タイプ原稿やそのコピーなどのいく種類もの原稿が残されているが、この改作のプロセスにおいてブロッホは、特にジョイスの『ユリシーズ』とドス・パソスの『U・S・A』に影響を受けたといわれる。『ユリシーズ』によって、建築学的・対位法的構成と認識論的ロマーンの構想を触発され、『U・S・A』の影響で、複数の独立的物語を平行的にロマーンに挿入し展開するというモンタージュ手法の導入に到る。そして1931年の3月に『夢遊の人々』とは無関係に、「哲学的かつ文学的な表現の諸形式」(Philosophische und literarische Ausdrucksformen)という70ページの論文が書き上げられる。この原稿は、あくまでも独立的に書かれたものであるが、これが7月下旬には、「価値の崩壊」と名づけられて附録ないしはあとがきの形で、第三部に添付されることになった。小説作品としてすでにまとまっている仕事を、さらに理論的で客観的な文章によって確実

に裏打ちしておきたいというブロッホの理論家としての情熱の発露である。しかしあまりにあからさまに、自らの手になる注釈的解説をロマーンに重ねることは断念せざるをえなくなる。そこで、これが物語の展開のなかに編み合わされ、ロマーンのなかに挿入されることになる。ロマーンの全体的構成にとっては、ほんらい異質の存在である論理的文章が、作品の内部に取り込まれ、連続的で対位法的構成をなすものとして各所に配置される。詩論と詩的作品が結合したことになる。こうしてユグノオ、パーゼノウ、エッシュという三人の人物をめぐるなんの変哲もないロマーンが、結果的には、合理性の極としての学問的省察「価値の崩壊」、非合理性の代表「少女の物語」、さらにはその中間のさまざまな理性の段階を示す平行的な複数の物語をも内蔵する多層的で多段階的なロマーンに生まれかわる。これはブロッホ自身の説明によれば、合理的な「島」と抒情的な「島」の不断の連続と結合を意図し、「不断に支柱をあてがうこと」によって両者が相補い合い、完璧を期することになる(8:68)。

「価値の崩壊」というタイトルをつけられた合計10章にわたる論述は、「歴史哲学に基づく完全に新しい認識論」(8:59)である。「価値の崩壊(一)」つまり第三部の第12章は、「このゆがめられた生はなお現実を持っているだろうか。この肥大症的な現実はなお生を持っているだろうか」(2:400)、という文章で始まる。この問題提起は、「価値の崩壊」10章全体の基本テーマであり、ひいては三部作全体の主要モチーフである。この第12章全体の要旨は、現代の人間は、その全体的宿命として非論理的なものないしはカオスの状態に直面しているが、それでも個人としての一人一人は、それぞれ個別的な部分的価値体系のなかで、私的論理を追求し、私的思考様式を形成している、ということである。全体としての人間の世界観や価値観はもはや存在しないが、個人はそれぞれに自分の人生を追求している。このような現状把握は、第三部の物語が展開されている時代の症状診断であり、ハンドリングの背後の世界を現状分析したものである。物

語と省察が平行的に同時進行してゆくのである。

「価値の崩壊」の(二)、(三)、(四)、つまり第20章、24章、31章では、「時代様式」が論じられる。時代様式というものは、すべての人間の思考や行為に浸透し、芸術作品をも規定し、文化を形成する。たとえばユグノオの思考や行為もそうであって、彼の内的論理は、時代の全体的論理に組み込まれている。1888年の様式はロマン主義、1903年は無政府主義とされているが、現代すなわち第三部の設定されている1918年、ひいては第三部の執筆された1930年代の初めの時代様式は、もはや様式とは言えない様式、すなわち「非様式」の時代である。

「価値の崩壊(五)」,第34章には「論理的付説」というサブタイトルがついている。ここでは、「論理学は数学同様にあくまで様式のないものではないか」という命題と、「形式論理の建物は内容の土台の上に立っている」(2:451)という反命題が対置され、結果的には現代の思考には様式がないと結論される。現代の人間の思考は、立脚点としての中心を喪失し、直接の対象ごとにその因果的思考構造を形成する。(六)の第44章がその実例を挙げている。たとえば経済的価値領域と芸術的価値領域と軍事的価値領域は、たがいに併存し、各領域はそれぞれ自律的であり、他の領域とは無関係にそれぞれ自己の領域の論理を追求する。徹底的に利益の追求を行なって独占的優位を達成しようとし、他をかえりみることのない経済的価値観、「まったく秘教的な、制作者にだけしか理解できぬような作品ができあがる」(2:475)芸術至上主義的価値観、軍事上の目的のためには「民衆を根絶し、寺院を破壊し、病院や手術室を射撃する」(2:474)軍事的価値観などが、それぞれ独立的かつ排他的に併存する。かつて中世において段階的に組み立てられていた世界の全体的秩序は、今や多数の部分的体系に、すなわち私的論理に立脚する各領域ごとの複数の秩序体系に分解し、各体系はそれぞれ独自の内在的公理を所有する。これは神に基づいていた思考様式の崩壊に源を発する壮大な世界の全体性の解体プロセスの最終的段階

である。次の(七)、第55章は、「歴史的付説」の副題を持っているが、これは(六)に述べられた事実の歴史的跡づけである。現代を最終的局面とする思考様式解体過程の端緒となった歴史上の転回点は、ここの記述によれば中世の後期である。「キリスト教的価値形成体がカトリックとプロテスタントとに半々に破碎された」(2:510)あの宗教改革が、その最初の徴候として捉えられる。あらゆるものが明白なる一点、つまり神において統合されていたキリスト教的な一神論の思考様式は、ここから「五百年にわたる価値解体の過程」(ebd.)に踏み出し、「個々の価値領域が一つの中心価値へ結びつくことは一挙に不可能となってしまった。」(2:477) (八)、第62章は、プロテスタントについて。プロテスタント神学には、実証的かつ科学的であろうとする努力の跡がみられるが、いわゆる「宇宙進化論」がみられない。それどころかプロテスタンティズムは、最初あらゆるものの粉碎を要求した。(九)の第73章は、「認識論的付説」という副題を持っている。哲学は、価値に無関係な認識と価値に関係づけられた認識という二つのものに分裂して、統合不能となり、破産した。結局のところ論理的・数学的領域に算入できるものは認識の対象になるが、それ以外のものは哲学の研究対象から除外される。このような形而上学の軽視という状況下で、認識の方法としてなお有効なのは、「措定」だけである。純粹な自我の措定からのみ様式が形成され、作品製作の可能性が生まれる。「世界は英知的な自我の措定」(2:596)となる。世界は、「措定の措定」、「措定の措定の措定」といった具合に無限の反復における措定の結果であり、これ以外に認識の方法はない。

そして、「価値の崩壊(十)」は第88章であり、「エピローグ」である。この章は、ここまでの9つの章とは性格が違ふ。それは論文形式ではないし、作者の自己告白と注釈が加わり、省察とさまざまのハンドリングのすべてがここに合流してくる。この部分で、『夢遊の人々』三部作のあらゆる流れが一つになり、終息する。「絶対的零点」(2:683)に立ち、

ヘルマン・ブロッホ『夢遊の人々』の「哲学的省察」について

「形而上学から追放された」(2:664)人間たちに対して、新しい様式への転換の可能性が暗示される。それは、「いまだなお、しかもすでに」(3:296)の状況である。そして三部作の終りは、「救世主」と呼ばれる存在の待望で終る。「真理の予感と感知」(2:449)や「魂の火花」(2:514)が、将来の弁証法的転換を暗示する。

以上のように十章に分載された「省察」は、物語の展開と対応関係を持ち、最終章において一つに統合されている。すなわち省察の部分は、第三部の物語の構造に対位的に組み込まれているのであり、無意味に散在しているのではなく、テーマ的な順序に従って、ハンドリングと有機的に咬み合わせられているのである。省察とハンドリングは、互いに他を反映し、交代し、共通のテーマを別の側面から捉えている。ブロッホの小説理論を解明するために重要なのはしかし、省察の内容ではなくて、省察が第三部の全体のなかでどのような位置を占め、どのような機能を果たしているのか、ということである。

### 3. 「省察」の機能と存在意義

すでに触れたように、小説が非小説的要素、たとえば学問的「省察」を内蔵するということは、過去に例がないわけではない。特にドイツのロマンは、たとえば、T・マンの『魔の山』やムシルの『特性のない男』におけるように、純粋な物語の展開だけでは飽き足らず、哲学的内容を、特に形而上学的な理念を内に宿すことが多かった。ロマン主義以来むしろ意識的に省察的内容が増加しさえしている。したがって単純に、ハンドリングを重視した物語性の豊かなロマンは伝統的な古いタイプのロマンであり、省察的内容を濃厚に持っているロマンは現代的であると断定することは、歴史的<sup>17)</sup>事実<sup>17)</sup>に反する。それでは、従来のロマンにみられる「省察」と、いわゆる「博識的ロマン」における「省察」とは、どう違うの

か。確かに後者におけるその量は、前者に比較すればきわめて多いが、「それは結局のところたんに程度の差にすぎないのであって、もっと決定的に重要なのは、その機能が変化したことである。<sup>18)</sup>」伝統的なものはふつう、「彼は---と考えた」という形式で、省察はある登場人物の思想内容としてロマーンに取り入れられる。この場合、省察は登場人物の性格づけの役割を果たし、作者の思想内容を代弁することになる。それは、時として知識の伝達が目的であり、場合によってはまた、作者の博識と教養とが誇示されることになる。しかもそれが作者自身の確信であるかどうかはしばしば不明確である。しかし、省察がハンドリングを阻害することは、この場合あくまでも慎重に避けられた。つまりあまりに多量の省察は、ロマーンらしさを損ねてしまうという理由で避けられたし、作者が直接的に作品のなかに現われ出ることも、その実例がないわけではないが、普通は不自然なものと考えられていた。しかし『夢遊の人々』第三部における省察は、必ずしも登場人物の発言としての体裁を取らない。つまり省察が、作者その人の思考の開陳であることを隠そうとしない。この場合、省察はロマーンの内容としてではなく、ロマーンの構成要素として機能している。ハンドリングと省察は、同じ資格を持って、一体となってロマーンを構成している。ロマーンは物語としての一貫性を放棄してしまっているものであり、ハンドリングに無関係なものが、そのままの姿で存在することを許している。省察は、一定の登場人物の発言や思考の内容としてカムフラージュされて、ロマーンに取り入れられるのではなく、直接的にロマーンの構成要素となるのである。

第三部のなかで10章にわたる「価値の崩壊」という文章を論述する人物は、「わたし」(Ich)である。「われながら不思議なことに、わたしは(Ich)ふたたび価値崩壊にかんする歴史哲学的な労作に没頭しはじめていた」(2:467)という文章のIchである。このIchとは誰であろうか。「ベルリンの救世軍の少女の物語」の語り手もIchである。そして、『哲学博士



ヘルマン・ブロッホ『夢遊の人々』の「哲学的省察」について  
ベルトラン・ミュラーです』と、わたしは(Ich)彼に手をさし伸べ」  
(2:431), という文章から判断して、この「少女の物語」のIchは、ベルト  
ラン・ミュラーである。結局のところ、省察の語り手のIchが、「少女の  
物語」のIchと同一人物であるとすれば、Ichはベルトラン・ミュラーで  
ある。さらにこのベルトラン・ミュラーは、どの程度まで作者ブロッホ  
と同一視しうる人物なのか、という問題もある。<sup>19)</sup> 作者ブロッホは、「省  
察」を、「むき出しのままであけすけに」(10:319), ロマーンに取り入れ  
たい。つまり彼は省察の内容に対する責任を他に転嫁したくないのであ  
り、また構成技法上もそれを登場人物に代弁させるという形を取ろうとし  
ない。しかしまた他方において、省察の部分と物語の部分とを、少なくと  
も表面的に関連させることによって、一つのロマーンとしてのまとまった  
体裁を作り上げようとする意図もある。だからこそ、「少女の物語」の  
Ichを、「価値の崩壊」の起草者に仕立て上げたのである。結局のところブ  
ロッホは、「省察」をあくまでも自分の直接的な発言にしておきたいので  
あるが、結果的には物語としての内的統一性のためにベルトラン・ミュ  
ラーをIchに仕立てて、代弁させる。ここでは作者の二つの態度が微妙に  
交錯している。<sup>20)</sup> 事実「少女の物語」にはIchがしばしば出てくるが、「価  
値の崩壊」の文中にはIchが出てこず、「少女の物語」の文章のごく一部に  
おいて、ようやく「価値の崩壊」の論者がIchであることを確認できる。い  
わば、「価値の崩壊」という省察の語り手は、一見したところでは作者自  
身であるという体裁を押し通そうとしているのである。

K・R・マンデルコウの論述の場合は、ベルトランは作者ブロッホの  
「偽装せる自画像」<sup>21)</sup> であるとして、ベルトランとブロッホをほぼ同一  
視している。しかし、H・シュタインエッケは、「ベルトラン・ミュラー  
は決してブロッホの自画像ではない」<sup>22)</sup> と断定している。ある観点からみ  
ればベルトランはブロッホであり、また別の観点からすればベルトラン  
とブロッホは別人となる。これはおそらく両方が正しいのである。プロ

ッホは、ある時はベルトラントに成りきるのだが、また時には、全くの別人となってしまう。つまり作者の態度は首尾一貫していない、とも言える。Ichの人物を特定化しえないということは、Ichが相対的存在であるということになる。Ichはもはや確固たる主体ではない。

結局のところ、Ichの人物を明確に特定化できない理由は、二つある。一つは、「少女の物語」という非合理の極を代表する物語と、「価値の崩壊」という合理の極を代表する論述が、つまり相反する二つのものが、ロマーンの内的統一という構成上の必然性から、両方ともに無理にIchという同一人物によって語られるということ。すなわち内容的な首尾一貫性よりも、構成上の意図の方が優先されている。もう一つの理由は、いわゆる相対性理論の方法にしたがってIchが主体であると同時に客体としても取り扱われるという事実である。主体と客体とは、もはや截然と区別されない。ベルトラントは、「価値の崩壊」の論者として叙述の主体であり、作者ブロッホに近い存在である。しかし同時に彼は、「少女の物語」において観察の対象にもなる。そこでは、彼の存在と意識状態が、批判的分析に委ねられる。ベルトラントはそれゆえ、主体でありまた客体でもある。そしてベルトラントと作者ブロッホは、同一人物であるとも言えるし、また同時に必ずしも同一視できない。結局この作品の場合、叙述の主体は特定化できないのであり、またその必要もない。主体はあくまでも相対化されているのであるから。ハンドリングと省察は緊張関係にあり、語り手は「理念としての語り手」となり、「描写対象と描写手段との統一」が行なわれている。

相対的なIch、つまり、「理念としての語り手」は、ロマーンにおける哲学的論説の開陳に、それなりの自信を持ち、その意義を確信している。「決して思い上って言うわけではありませんが、私の『価値崩壊』は、歴史哲学上完全に新しい認識論の輪郭を代表しています」(8:59)。ロマーンは、「哲学によってはもはや処理できない領域」(6:203)を引き受ける。ロ

マーンは、純粋な学問としての哲学の果たしえない仕事、つまり合理的認識を芸術的認識のなかに統合することによって、総体的な認識を確立しようとする。したがって第三部は、合理的な「価値の崩壊」、非合理的な「少女の物語」、その中間段階の様々の平行的物語など、あらゆる平面を、多層的かつ多段階的に内包している。理論的な言語構築物と抒情的な言語の流れの対照、およびその交代現象が基礎となって、ロマーンが展開する。科学と文学とが相互に浸透させられ、協働させられる。ロマーンにおいて科学と抒情性が共生する。長いあいだ価値論の論文執筆に従事していたブロッホが、1932年に到達したのは、この学問とロマーンとの統合であった。<sup>23)</sup>

問題はこの統合が成功しているかどうか、である。ロマーンが省察ないしは哲学を内蔵するのは不可能ではないか、これはたんなる寄せ集めの混淆にすぎないのではないか、という点である。さらに言えば、ロマーンにとって科学性の過剰は、異質物の混入にほかならず、無用なものを多量に所有しているだけではないのか、という危惧である。

伝統的なロマーンの場合には、物語のハンドリングこそが本来的要素であるから、それ以外の要素をいかに自然に叙事的全体のなかに溶け込ませ、消化してしまうかということが問題になる。しかし『夢遊の人々』の第三部の場合には、ハンドリングはもはやその中心的役割を演じない。だからここでは、「省察」をいかに自然にハンドリングのなかに埋め込むかということではなく、この両者がいかに自然に全体としてのロマーンを構成するか、が重要なのである。問題は物語の経過にあるのではなく、物語の構造にある。作品の構造が全体としての統一を完成していなければならないが、ブロッホによればそれは、「観念連合とシンボル系列との徹底的な貫徹によって、全体的構造の綿密な量り分けによって、個々の諸部分における主要構造と基本的モチーフとの規則的な回帰によって」(8:19)可能になる。

そしてこれを可能にする彼の叙述技法は、「建築学的」とか「対位法的」と呼ばれる。たとえば「価値の崩壊」の各章は、意識的に「少女の物語」に対応させられ、いわゆる対位法的構成原理にしたがっている(8:60f.)。

「価値の崩壊」各章の挿入は、改作の最終段階で行なわれたので、すでに完成しているさまざまな物語の合間に、つり合いを失うことなく慎重に編入されねばならなかった。結果的にはしかし、「少女の物語」という主観的側面がこの理性的要素の差し入れによって補完され、ロマンの構造に全体的一体感が与えられた。物語の内容上の統一は、エピローグにおいて暗示されているにすぎないが、ロマンの構造上の建築学的統一は、対位法的な並列的関連づけによって達成される。「価値の崩壊」の10章は、たんに物語部分の理論的注釈としてのみ理解されるべきではないし、いわんや両者が無意味に並置されていると考えるべきではない。

第三部の成立に到るまでの執拗な書き込みと書き直し、止めどのない改作の積み重ねは、特定の表象やモチーフの繰り返しとシンボルの完成に向けられ、同時により確かな造形のための不断の調整、変更であった。その結果、一見無関係に見える別々の独立的物語は、「絨毯のように織り合わされている」(8:57)。そして第59章では、最終章に先立って、出来事の流れがいったん収斂させられる。「シンボルの鎖はすべて一つに会し、ライトモチーフによる結び目は最高の密度にまで高められる」(6:194) またエピローグでは、個々の物語が統一されるだけでなく、あらゆるシンボルの鎖が最終的に集中する。さまざまの複数のモチーフがここに終息する。「この本のあらゆる糸をもう一度取り上げて最後の結び目に結び合わせる」(10:329)。文学的完成度から言えば『ウェルギリウスの死』の方が優れているかも知れないが、ブロッホの文学理論がより直接的に具体化されているという意味でも、『夢遊の人々』の第三部は意義深い作品である。

注 1) ブロッホが、Polyhistorismusとかder polyhistorische Romanとい

う語句を口にするときにあげられる名前は、ジョイス、ジード、ムシル、トーマス・マンそれにハクスリー等である。また作品名で言えば、『ユリシーズ』、『贗金づくり』、『特性のない男』、『魔の山』それに『恋愛対位法』である。

- 2) ブロッホの論文, *Die mythische Erbschaft der Dichtung, James Joyce und die Gegenwart* さらには, *Das Weltbild des Romans* 等を参照。さらに彼の書簡のなかにも, このことについてのさまざまな言及がみられる。たとえばライン版全集8巻の60, 130ページ, 10巻の319ページなど。
- 3) Richard Brinkmann, *Romanform und Werttheorie bei Hermann Broch. Strukturproblem moderner Dichtung.* In: Reinhold Grimm, *Deutsche Romantheorie*, Band 2, Frankfurt am Main (Athenäum) 1974, S. 391.
- 4) Erich Kahler, *Untergang und Übergang der epischen Kunstform* (1953), In: Hartmut Steinecke, *Theorie und Technik des Romans im 20. Jahrhundert*, Tübingen (Max Niemeyer) 1972, S. 73.
- 5) Ebd., S. 74.
- 6) Ebd., S. 76.
- 7) Hermann Broch, *Gesammelte Werke in 10 Bänden*, Zürich (Rhein) 1952-1961, Bd. 7 S. 101. なお, 以下においてブロッホの全集からの引用は, 本文中にその巻数とページを略記する。引用文で翻訳のあるもの(以下に記する翻訳書)は, その訳文を使用させていだいた。都合で訳文の一部を変更したものもある。
- 菊盛英夫訳『夢遊の人々』中央公論社1971年。入野田真右訳『崩壊時代の文学』河出書房1973年。入野田真右訳『知られざる偉大さ』河出書房1975年。浅井真男訳『罪なき人々』河出書房1970年。
- 8) Bruno Hillebrand, *Theorie des Romans II*, München (Winkler) 1972, S. 148.
- 9) Vgl. ebd., S. 156.
- 10) Manfred Durzak, *Hermann Broch. Der Dichter und seine Zeit*, Stuttgart (Kohlhammer) 1968, S. 86.
- 11) Ebd., S. 87.
- 12) Vgl. Hartmut Steinecke, *Hermann Broch und der polyhistorische Roman. Studien zur Theorie und Technik eines Romantyps der Moderne*, Bonn (Bouvier) 1968, S. 48.
- 13) Ebd., S. 48f.
- 14) 参考までに, 第一部と第二部の概略を述べておきたい。  
第一部は, ベルリンで士官として勤務するプロイセンの若い地方貴

族，ヨアヒム・フォン・パーゼノウが主人公。酒場の女性（ルツエーナ）との愛，故郷シュトルピンの良き隣人の娘（エリーザベト）との結婚の物語。軍服，田舎での貴族的生活，階級的慣習の不確実性，そして風俗画のような地方の情景などに象徴されるパーゼノウの「ロマン主義的」生活は，商人としての明確な自己意識を持って生きる友人のベルトランツの言動によって揺るがせられる。ロマン主義的な生活秩序の疑わしさが指摘され，みずからの存在の不確実性が覚醒させられる。パーゼノウは，外部から入り込んでくるさまざまな不合理なものともみずからの内部の理性とを統合することによって，一定の認識を確立することができるにもかかわらず，彼はそれを望まない。彼は，「認識を恐れている」（2：475）のであり，それ故にこそ「ロマン主義者」と呼ばれる。

第二部は，短気で激情家の薄記係アウグスト・エッシュが主人公。彼はさまざまな欲望に駆られて世界をよろめき歩く。ケルンの会社をクビになって，船舶会社の倉庫管理人としてマンハイムで働くが，この会社の社長が第一部に登場したベルトランツ。エッシュは，このベルトランツと対立して，再びケルンで女子レスリングの興行に加わり，最終的には居酒屋の下品な未亡人ヘンティエンと結婚する。エッシュは，個人的にはつねに秩序をのぞみ，「一義性と絶対性」（2：291）を求めるが，いたるところで世界の「無政府主義的状态」（2：248）にぶつかる。タイトルにもあるように，第二部の時代の代表的性格が無政府主義であり，エッシュの行為と思考は，混乱し錯綜して，秩序と救済はえられない。エッシュ（非理性的無政府主義）とベルトランツ（理性と秩序）の対決は解決されないまま存続する。

- 15) Vgl. Hermann Krapoth, *Dichtung und Philosophie. Eine Studie zum Werk Hermann Brochs*, Bonn (Bouvier) 1971, S. 149.
- 16) Manfred Durzak, *Hermann Broch : Dichtung und Erkenntnis. Studien zum dichterischen Werk*, Stuttgart (Kohlhammer) 1978, S. 33-60.
- 17) Vgl. Karl Robert Mandelkow, *Hermann Brochs Romantrilogie "Die Schlafwandler". Gestaltung und Reflexion im modernen deutschen Roman*, Heidelberg (Carl Winter) 1975, S. 49.
- 18) H. Steinecke, a. a. O., S. 56.
- 19) 第一部のエドゥアルト・フォン・ベルトランツと第三部のベルトランツ・ミュラーが人格上一致するかどうかの問題も重要であるが，この小論では，主として第三部のみを扱っているので，ここでは触れない。

ヘルマン・ブロッホ『夢遊の人々』の「哲学的省察」について

- 20) Vgl. H. Steinecke, a. a. O., S. 77f.
- 21) K. R. Mandelkow, a. a. O., S. 152.
- 22) H. Steinecke, a. a. O., S. 143.
- 23) Ebd., S. 72.